

スポーツ行動の概念構築のための基礎作業

—— スポーツ行動と社会行動 ——

山 本 清 洋

はじめに

スポーツ社会学の原初語はスポーツである。スポーツ社会学はスポーツの概念定義を明確にすることによって、スポーツ事実及びスポーツを取りまく問題の解決にあたることができ、その理論体系化へむかうことができる。

概念はものの本質をあらわすとともに、分析的道具であらねばならない。今日、スポーツに関する概念をいろいろみることができるが、それらは、実体的定義にとどまり、分析手段となりえていない。そのため、スポーツ事実の解明を行う際に問題が生じ、学問としての性格、その理論体系への障害となっている。

本論では、スポーツの分析的概念構築の基礎作業として、スポーツと社会行動、及び社会学理論のスポーツ社会学への適応という視点から、今日概念から生じる諸問題に解れ概念構築の方向が、社会行動との関連から考えられることを仮説的に述べてみる。

I 今日のスポート論の特性

スポーツの定義は、スポーツが歴史的、社会的、文化的遺産であるために、まだ統一されたものをみることができない。というものの、重大な社会的問題と化しているスポーツ現象の解明、あるいは、スポーツの科学性すなわち研究の面からも、スポーツ概念の統一は急を要することである。

今日の定義の多様性、困難性の諸原因が歴史的、社会的、文化的諸事実との交錯にあることから、一般的にみられる概念統一の方向は、これらの諸事実から分離されたすなわち人間の内的欲求を基盤とした方向が前提となっている。J.ホイジンハ、R.カイヨワのプレイを、人間の共通に持つ欲求としてとらえ、スポーツの基本的特性とし、更に身体運動、競争との結びつきにおいて、スポーツの概念化が試みられている。

竹之下は、スポーツがプレイから発展したものであるとはいえないが、その基本的性格においてプレイであるとし、更に「これらに共通な性格としてあげられるものは、外目的的でなく、内的欲求充足のための、自己目的的な運動である¹⁾」と述べる。

概念をめぐる、諸家の中で、若干の相違はあるにしても、竹之下の方向は、現状では一般的なものと考えてよい。

次に、スポーツの分類をみてみよう。P.C. McIntosh は“動機と行動が与える満足”の視点から ①競争的スポーツ、②闘技的スポーツ、③克服スポーツに分類している。更に、スポーツではないが、スポーツに類似した身体活動として体操、ダンス等もあげている。又、John. w. Roy は、ゲームが組織化されたものをスポーツとして ①身体活動のゲーム ②闘争のゲーム ③運のゲームに分類する。この他、競争 (agōn) の度合を基準とした、高度

化スポーツ、大衆化スポーツ、目的、手段の視点から、プロスポーツ、アマ・スポーツの分類もみられる。又、スポーツは、文化人類学的視点から、スポーツを行動様式として捉えることによって、その構成要素が分析されている。すなわち、①行動様式としての身体運動 ②技術 ③ルール、マナー、スポーツマンシップ ④基本的性格としてのプレイの特性等がスポーツの構成要素とされている。スポーツの構造化に関しては、大橋の「現代スポーツの概念試論²⁾」がある。

Ⅱ 今日のスポーツ概念から生じる問題

体育社会学の性格について、多くの人々が言及しているが、総じて教育社会学にその方向を求め、社会学理論に研究方法の援用を求めている、と言える。竹之下は「体育の事実や問題を、社会学の態度（経験的且実証的）、理論、方法をもって研究し、その成果の体育の進歩や問題の解決に役立てようとする学問である³⁾」とする。菅原もこれに近い表現をとり「体育事実及び体育に関係する問題を社会学的視点から、客観的、実証的に研究し、体育の合理化を図ろうとする科学⁴⁾」と、その性格を定義する。竹之下が実践的側面を強調するのに対し、その側面も認めながら、合理化という言葉の中に理論構成的側面の方向を菅原にみることができる。この傾向をより明確にしたのが近藤である。彼は「体育的諸活動を社会の構造と機能の中に位置づけて、分析解明し、特にその規定的成果をふまえた理論的な整備を行う経験科学である⁵⁾」とし実践的側面に伴う理論体系化の方向を強調している。

以上、3氏の例から、体育社会学の分析対象の中心は体育事実であり、その研究方法においては、社会学の方法論的枠組の適用が図られていることがわかる。本論はスポーツ社会学の学論的基礎作業でもあるが、ここでは、スポーツ社会学と体育社会学の性格を学論的には言及しない。上に示した体育社会学の定義のうち、“体育”を“スポーツ”に言い換えることで、スポーツ社会学の性格が表わしうと思えるからである。只、竹之下が「スポーツ社会学は、…社会学の特殊専門的分野として、また、スポーツの科学の基礎部門として、スポーツの事実や問題を社会学的観点から、実証的、客観的に研究しようとする⁶⁾」と、その性格を定義づけることを考え併せると、体育社会学が教育学の下にスポーツ社会学が社会学の下に位置するという根本的相違があることは明らかである。スポーツ社会学の分析対象の中心概念がスポーツであり、その研究方法は社会学の方法論的枠組の援用であることは、以上のことからあきらかである。

さて、今日のスポーツ社会学の諸研究は、プレイを基本的性格とする概念と上述した学問的性格の上でなされている。しかし、そのために次のような諸問題を生じることになる。

- ① 日常経験するスポーツ行動(注)やスポーツ事実を解明する際に概念的矛盾が生じる。
- ② 社会学の方法論的枠組を適用する際に、前提条件の検討が十分になされていない。
- ③ 諸研究の成果が、統合的な理論体系化の方向に向っていない。(注)、非日常的という特性を含まない意味を強調するための用語。

項目①について

外目的的でなく、内的欲求充足を求める自己目的的行動であり、具体的には fun（緊張、遊び、面白さ）の追求である、とした J・ホイジンハのプレイを、欲求充足過程は決して単一ではない、と R・カイヨワは批判をした。そして、欲求充足の過程を、プレイヤーの心理的態度に基づき4つのカテゴリー（アゴーン、アレア、ミミクリー、イリンクス）に分類した。更に、経験的なプレイの形態を、上の4つのカテゴリー及びその組合せに対応させている。そこ

では、スポーツはルールのある競争と定義され、アゴーンに対応した行動とされている。しかし、スポーツの概念がプレイ論に立脚する限り、スポーツは、fun（緊張、喜び、面白さ）の追求であり、行うこと自体が目的である自己目的的行動である。只、スポーツの基本的性格にプレイを位置させ、概念化の方向を図ることは、実体的定義としては正当である。しかし、実体的定義は、スポーツの性質を分析することはできるが、事象間の関係や機能を確定する際に問題が生じることから、fun の追求である自己目的的性格が問題となる。

さて、経験的スポーツ行動をみてみよう。そこには形式が異なる多くのスポーツ行動、および、異なる性格を待つスポーツ行動が存在している。前者は、P. C. McIntosh や Roy 等の分類にみる。スポーツ種目のことである。後者は、大衆化スポーツ、高度化スポーツ、その他、アマ・スポーツ、プロ・スポーツの分類である。更に、アマ・スポーツの中に、ステイト・アマ、ミリタリー、アマ等を見ることが出来る。後者にみる諸スポーツ行動は、分類基準が理論的に不明確であり、相互間の関連もない。時には、スポーツの手段化が、ある時にはアゴーン追求の度合いが、又ある時には、プレイヤーの社会・経済的基盤との結びつきの度合いが、それぞれの分類基準となっている。しかし、ここで問題になるのはこのような分類基準そのものではなくて、上記のスポーツ行動が、単に fun を追求する自己目的的行動でない、ということである。プロ・スポーツにみる外目的的行動、あるいは、日中親善使節として来日した中国卓球選手にみる役割行動のスポーツ行動等の例をみても明白である。ここにプレイ論に立脚したスポーツ概念の概念的矛盾が生じる。

本能、4つの心理的カテゴリー、そして、ルールの組合せによる行動＝プレイに立脚する概念は、社会学、社会心理学でいえば、モナディックな立場に極めて近いといえる。一方、上述した諸スポーツ行動は、スポーツ（プレイ論に立脚する）と社会とのダイアディックな関係から生じる行動である。スポーツは決して当為ではなく存在である故に、概念上の矛盾は当然生じることになる。

只、カイヨワ自身も、遊びの「特質は遊びの世界を強く現実の世界と対比させ、遊びが別種の活動であることを強調することによって、日常生活によるあらゆる汚染が、遊びの本質そのものを変質させ、破壊することを予想させるものである⁷⁾」と述べ、社会とのダイアディックな行動になることを予想しながらも、本能、ルール、4つの心理的カテゴリーの組み合わせの域にとどまり、ダイアディックな行動（カイヨワでいえば変質したプレイ）を、あくまでも、本能と4つの心的カテゴリーのみで論じるところに矛盾を生じる原因を見ることが出来る。

私は、ここで、プレイ論に立脚するスポーツの概念を否定する意志はもたない。只、その方向において分析的概念の構築を行うとすれば、そこから、はみでるスポーツ行動が存在していることから、それらを包括する概念構築の方向と、更にその方向におけるカテゴリー化を図ることを提示しようとするものである。いわば、社会行動の視点からの概念化と、そのカテゴリー化を提示するものである。

項目② 方法論的枠組の適応について

科学においては、いずれの領域においても科学性の規範としてあらかじめ用意された方法論的枠組が問題を選択したり、対象の処理等々を行う際に、その座標軸となるにしても他の領域で成功裡に用いられた既存の方法論的枠組が、別の領域に同様に適応できるにはそのための前提条件⁸⁾が存在する。一つは、対象的諸事実が近似的、相似的性格にあること、ついで、研究者がそれぞれの当刻の対象に同じような条件と態度で望みうる場合である。前者は、社会学の分析対象の中心的概念である社会行動とスポーツ行動との関係、後者は、スポーツ社会学的分析における中心問題と社会学における社会学的分析の中心問題の関係をそれぞれ比較検討する

ことが、前提条件の克服につながる。

プレイを基礎とした社会学の構築を試みるカイヨフは、プレイと現実社会との関係について、「プレイは変り易い内容、時には、日常的内容とも交換可能な内容を持つ固有の領域を占めている⁹⁾」ものであり「その社会における文化と相互関係にあり、文化はゲームの構造と密接な関係にある。……。プレイと現実の構造とは同一であり、それぞれの活動は、時間と空間においてお互いに還元できない領域でいつも生じている¹⁰⁾」と述べている。要約すれば、交換可能な内容であり、構造は同一であるが、互いに還元できない関係にある、ということになる。

すなわち、プレイと社会行動の属性は異っており、したがって、スポーツと社会行動は、相互転換可能な連続的行動でないことを示す。

現在のスポーツ社会学での諸研究は、社会学の方法論的枠組が機械的に適応されているが、その前に、スポーツと社会行動との関係を明確にすることが、科学としての道程であろう。スポーツ社会学は、社会の構造と機能との関係において、スポーツ事実を分析するという性格をもっておることを考えれば、その必要性は尚さらである。

前に、同形式のスポーツ行動にも、プレイヤーの異なる意識が伴うことをみた。社会学の視点からは、スポーツ行動を単に心理学的帰属主義において説明することはできない。スポーツ行動がいかなる社会的意味をもつものであり、それがいかに、社会とダイアディックな関係にあるかという視点から説明する必要がある。すなわち、社会とのダイアディックな行動として、スポーツ行動を把えることが必要となる。

項目 ③ 諸研究結果の統合的体系化について

スポーツ行動の構成要素は、広義の文化概念の適応の下に、〔I〕でみたように、4つの要素に分類されている。構成要素は、スポーツ行動そのものとの構造—機能的視点から、構造化される必要がある。しかし、先にみた分類は、単に文化的要素がスポーツ行動に含まれているということから、相互の関連を考察することなく分類されているにすぎない。そして、今日の諸研究は、文化人類学、社会学、社会心理学の諸方法論的枠組の下に、各要素が無関係のまま進められている。

今日の社会学が、その理論体系の欠陥を「それは、社会学のテキストの編成に見い出される。そこには、伝統的に社会学の扱ってきた、家族、地域、社会階級、世論などわりに興味深い題材が並んでいるが、これらの題材が理論的に結びついていない¹¹⁾」と批判されているが、今日の研究方向にあるスポーツ社会学は、将来、同様な批判の対象になりうる事が予想できる。

さて、以上の項目について、それぞれ論じてきたが、根本的なことは、プレイをその基本的特性とする現在のスポーツ概念の実体的定義を、社会とのダイアディックな関係において、操作的定義ないしは函数的定義になおすことの提示に他ならない。そのための作業として、次はスポーツ行動と社会行動の関連について検討することが必要となる。

Ⅲ スポーツ行動と社会行動¹²⁾

経験的スポーツ行動に、内的欲求充足のための自己目的的性格を持たない行動の存在を前章においてみたが、自己目的性であれ、外目的性であれ、いずれにしても、スポーツ行動が「欲求にはじまる目標達成的行動」であることは間違いない。

一方、社会行動は「欲求によってはじまり目標達成によって終る状況関連的な欲求充足の過

程である、とするのが、一般的な定義である。更に、社会行動は、①生得的な、および学習によって内面化された欲求の複合体に動機づけられることにより、行動者自身が能動的におこすものである。②行動主体によって認知された状況と一連の関連を持つことによって、はじめて遂行される。③状況関連的という用語の状況とは、行動主体によって認知され、その結果として、彼の行動に何らかの仕方で、介入してくるような客体である、という特性を持つ。プレイが非日常的行動とされる点への、多くの批判は、特に状況関連をめぐってなされるので、状況について簡単に述べてみる。状況の構成要素は、T・パーソンズによれば、① Physical object, ② Social object, ③ Cultural object の三要素に分析される。更に、これらの各要素は、行為者が目標充足に至る過程において、Physical object は、手段、素材、条件として、Social object は、手段、素材、条件、妨害者として、更に Cultural object は、手段、素材、条件、規範的規制として、その機能を果す。

スポーツ行動が、欲求に始まる目標達成行動であり、しかも、社会とダイアディックな関係にあることは、社会行動でいえば状況関連に対応することから、スポーツ行動は社会行動の一特殊行動であるといえる。スポーツ社会学への社会学的方法論の適応のためには、社会学の原初語である社会行動について述べる必要がある。以下、社会学の原初語として社会行動を用い、それ以外の社会行動を一般社会行動として用いる。社会行動についてはM・ウェーバーの「行為とは、行為者がそれに主観的な意味を結びつけるとき、その限りでの人間行動のことをさす」¹³⁾ という定義が広く知られるものである。M・ウェーバーは、行為を理解する際に、主観の意味を行為者の動機に逆のぼって理解する方法をとっていることから、先に示した社会行動の欲求充足が主観の意味に相当するとみてよい。社会行動の特性は状況において、他者と連関的であること、すなわち他者と相互作用にあることにある。この他者連関は、直接的関係と間接的関係に分かれ、社会学の分析対象は、直接的関係に限定される。本論では、社会行動を「他者の行動を直接的インプットの源泉とする状況関連的自我の欲求充足過程」と定義する。したがって、他者と自己の間に、input・output の関係による「社会財」¹⁴⁾ の交換がおこなわれる行動ともいえる。

スポーツ行動を社会行動との関連を状況関連の視点から分析する場合、①個と個のあいだの input・output 関係と、②個と全体(社会)の input・output 関係の2つの次元で考える必要がある。前者はスポーツ行動そのものの状況での他者連関関係であり、後者はスポーツ行動と社会とのそれである。スポーツ行動は、競争を伴う欲求にはじまる目標充足過程であるから、相手の行動に伴うシンボルが行動の直接のインプットになるため、分析方式としては社会行動と相似の行動になる。相手が視界にない場合はどうであろうか。この場合にも、主体は相手の行動を想像的に意識することによって、自己の行動を決定する。状況関連的ということは、主体が状況をどれ程、認知するかという認知範囲によるものであることから、後者の例も相手を想像することによりシンボルの交換が行なわれているとみてよい。

R・カイヨワは「アゴーンはもちろん、アレアもミミクリーもイリンクスも、遊びのそれぞれは孤独でなく、仲間を前提とする」¹⁵⁾ として、競争の形式をとらないプレイも、社会行動と相似にあることを示している。

以上のことから、スポーツ行動は、社会学の分析対象の中心概念である社会行動と同様に input・output の分析方式によって把握されうること、すなわち、相似的關係にあることがわかる。しかし、この考察のみでは、スポーツ行動と社会行動が連続した転換可能な行動であるとはいえない。R・カイヨワは両者の関係を交換はできるが、還元できないとしている。すなわち、両行動は本質的に異なるものであり、相互転換できないものとする。

この点について、更に深く分析してみる。Ⅱにおいて、プレイ論に立脚したスポーツ行動を「行為に思念された意味、の視点から問題化した。そして、経験的スポーツ行動のなかから、その性格において、社会行動と同一なスポーツ行動を例示した。役割行動的スポーツ行動、スポーツを手段とした外目的的行動がそれである。役割行動的スポーツ行動においては競争を継続させるためのシンボルの交換が行なわれているが、同時に役割遂行のための、シンボルも交換される。例えば、日中親善卓球大会においては、極めてルールに従った行動、相手を気付けるフェア・プレイが随所にみられた。この行動は、スポーツの絶対的ルールのみ支配された行動ではなく、同時にスポーツ行動を通して親善を果すという意識が要因となった行動として理解しうる。又、カイヨワは、プロ・スポーツについて、それが報酬のために演ずる行動であったにしても、競争の本質は殆んど変化しない。相違があるのは当人にとってだけであるという意味を述べているが、これはまさしく当人の意識の転換がスポーツ行動において行なわれることをあらわす。

以上の例は、スポーツ行動を継続させるシンボルが、社会的役割を遂行するシンボルや社会財を獲得するシンボルに転換しうることを表わしている。すなわち、同じ種類のシンボルの供給が、供給者の期待いかんによっては、社会行動にもなりうるし、スポーツ行動にもなりうるという相互転換性を示すものである。

以上の考察によって、スポーツ行動と社会行動は、相似の関係にあり、社会行動と連続した相互転換関係にあることがわかった。

個と全体の次元という視点からは、T・パーソンズのA・G・I・L理論においてスポーツ行動はL次元に所属するものであり、しかも、4つの次元がそれぞれ、境界相互連換作用¹⁶⁾の関係にあることから、明らかに、分析方式において社会行動と相似である。ここに社会学の方法論的枠組が、スポーツ社会学へ適応できうることをみる。

しかし、この結果から、社会学理論によって、スポーツ事実の解明は、全て出来うるといえるだろうか。結論的に言えば、スポーツ行動と社会行動の持つ本質的屬性に相違があるために、その解明は限界を持つといえる。そして、その限界は、スポーツ行動、社会行動における価値体系の相違に起因する。

スポーツ行動の主体は、欲求から欲求充足に至る状況との関連過程において、欲求充足のための選択を行なう。その際の選択基準は「主体の存在に必要な選択作用における選択基準として機能する表象」¹⁷⁾としての価値である。それは、相互交換されるシンボルが準拠する価値でもある。我々は、M・ウェーバーにみる価値合理的行為とか、作田の「価値の一貫性」に基づく行動を経験することがある。その際、行為者は、その価値による選択を行なうことが目標充足を可能にする。しかし、その価値が全体社会の価値体系と一致しない場合、文化的、社会的統制が生じる。この例にみるように、社会行動においては、行為者の所属する社会の価値を基準とした方が目標充足は容易になる。

一方、スポーツ行動では、ルールの範囲内で相手の期待に反する行動（例えば、相手の裏をかくとか意表をつく行動、野球にみるスチール……）を行なうことが、目標充足の可能性を大にする。スポーツ行動以外の社会行動における競争においても同様なものを見ることはできる。しかし、スポーツ行動における反役割行動は賞讃をうけ、認められた行動様式として継続するのに対して、社会行動では必ずしも、賞讃をとまなうとは限らず、認められた行動様式として継続され難い。又、スポーツ行動における反役割行動は、全体社会のなかに市民権を獲得している。先に、スポーツ行動は社会行動と、相似的、相互転換関係にあるとした。しかも、今、両行動の選択基準の準拠する価値体系に相違のあることをみた。「価値基準は、価値判断

の準拠が語るコミュニケーション内容によって構成¹⁸⁾されることから、上の価値体系の相違は、両行動が状況要素にどのように関連し、又、その価値判断の準拠する要素の集合が何であるのかによって生じている。作田は、選択の原理は「手段としての有効性」、「価値の一貫性」「欲求充足にとっての適切性」の3原理に尽きるとし、第三の原理「欲求充足にとっての適切性」をプレイの選択基準とする。更に、プレイの価値体系について「自由あるいは、遊びの世界から、価値がどのように形成されるかという問題¹⁹⁾を「正面から取り扱うためには、社会体系とパーソナリティ体系の類似性を強調する概念枠組から離脱しなければならない。類似にもかかわらず、相違があるとする立場を築く必要がある²⁰⁾と述べる。この作田の仮説は、社会行動とスポーツ行動の本質的価値体系の相違を示唆するとともに分析的概念を構築する際の、パーソナリティ体系と社会体系の抽出の仕方に重大なヒントを与える。

以上、考察した社会行動とスポーツ行動の属性の相違は、社会学とスポーツ社会学の分析の中心問題の相違へとつながる。

社会学は、社会学的分析の中心問題を社会行動を中心とした諸活動の「機能」「貢献（逆機能及び負の貢献を含む）」においている。その意味において、社会学にとってのスポーツ行動は、個と全体の次元、すなわち、スポーツ行動の全体社会への「機能」「貢献」という視点から問題化される。一方、スポーツ社会学は、①個と個のレベル（パーソナリティ体系と社会体系の類似性を前提としない個人の欲求の極大化行動）と、②個と全体のレベル（これは、社会学と同じである）及び①と②の関係、という3つの視点から、スポーツ事実を問題とすることになる。

〔むすび〕 スポーツ行動の概念化の方向

これまでに、スポーツ行動を中心として、いろいろ論じてきたが、大方、次の項目に要約できる。

- ① プレイ論に立脚する概念は、スポーツ行動が社会とのダイアディックな関係にあることから、経験的スポーツ行動との矛盾が生じる。
- ② スポーツ行動は社会行動と、分析方式（input・outputの相互交換過程）において相似の関係にある。更に経験的スポーツ行動のなかに、社会行動と連続した相互転換関係にある行動をみることができる。
- ③ しかし、両行動において、その属性に相違がみられることから、スポーツ事実の社会学理論による解明には限界がある。

この3項目から、概念構築の方向を探ってみる。プレイ論に立脚したスポーツ行動の概念が実体的定義として認めうることは、社会行動とスポーツ行動の価値体系の相違から明白である。しかし、プレイが社会とのダイアディックな関係にあることから、経験的スポーツ行動を包括しうる分析的概念とはなり得ない。項目②にみる両行動の関係から、社会行動に立脚した分析的概念の構築が、今後の方向であろう。只、作田も言うように、スポーツ行動と社会行動は価値体系を異にし、更にパーソナリティ体系と社会体系の関連にも相違がある。この点に関する社会学的研究は皆無に近い。そこで、第一の方法として、プレイを基本的性格とした概念と状況要素との組合せから派生語をつくり、構造記述的研究を進めることによって、この点の解明をはかりスポーツ行動の構成要素をみい出す必要がある。あるいは、この相違を含む（社会行動と転換関係にないスポーツ行動）経験的スポーツ行動を事例的に蒐集し、その中に存在する基本的傾向を社会学の視点から抽出し、構成要素をみい出すことも必要である。いずれか

の方法によって解決がつけば、両行動が分析方式において相似であることと、この分析方式を出発とした行動に関する一般的分析概念²¹⁾が完成しつつあることから、スポーツ行動の分析的な概念は、一般社会行動論を基礎とするシステム行動論へ発展してゆくだろう。

引用文献

- 1) 竹之下休蔵 スポーツ社会学, 大修館書店, P.13, 1965
- 2) 大橋美勝 現代スポーツの概念試論, 岡山大学教育学部研究集録, 34号, 1972
- 3) 日本体育学会編 体育学研究法, 杏林書院, P.308, 1957
- 4) 菅原礼 体育社会学, 大修館書店, P.1, 1972
- 5) 近藤義忠 体育社会学の方法と課題, 道和書院, P.15, 1972
- 6) 竹之下休蔵他 スポーツの社会学, 大修館書店, P.18, 1965
- 7) R・カイヨワ 遊びと人間, 岩波書店, P.63, 1970
- 8) 三和和男他 講座哲学, 科学と方法, 岩波書店, 1968 を参照にした。
- 9) 10) R・カイヨワ 前掲書, 第5章を参考にした。P.81~97
- 11) 森岡清美他 現代社会学の基本問題, 有斐閣, P.218, 1971
- 12) 社会行動に関しては, 大部分が次の要約である。富永健一, 思想「社会行動分析の基礎」12月号, 岩波書店, P.24~39, 1966
思想「経済行動と社会行動」5月号, P.61~81, 1971
- 13) M・ウェーバー 社会学の基礎概念, 角川書店, P.8, 1954
- 14) T・パーソンズは, 社会財を①報報の知識, ②衣, 食, 住, 芸術, 文化財, ③威信や社会信用に分類している。
- 15) R・カイヨワ 前掲書, P.61
- 16) この相互連関については, T・パーソンズ「経済と社会」, 岩波現代叢書, 1956
R・N・ベラー 日本近代化と宗教倫理, 未来社, 1970 に詳細してある。
- 17) 貝田宗介 価値意識の理論, 弘文堂, P.62, 1973
- 18) 貝田宗介 前掲書, P.68
- 19), 20) 作田啓一 価値の社会学, 岩波書店, P.442, 1972
- 21) 広瀬和子 紛争と法, 勁草書房, 1970 にみることができる。そこでは, 一般行動理論に立つシステム理論を構築している。

(昭和49年3月30日出稿)